

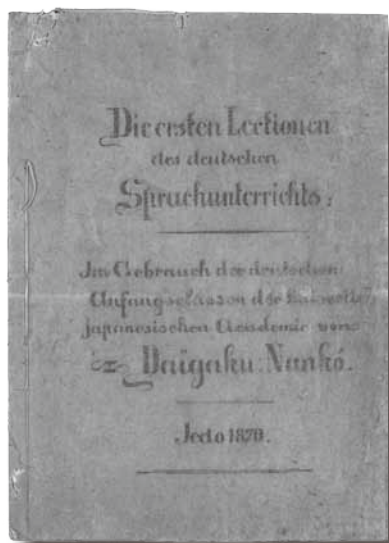
東京大学 文書館ニュース

The University of Tokyo Archives Newsletter

vol. 54, Mar. 2015

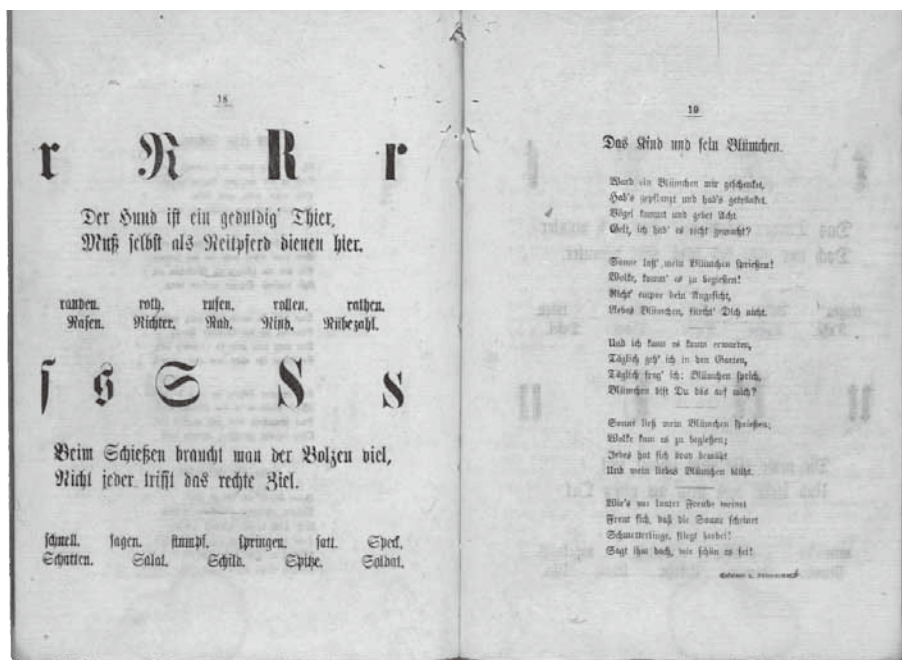
Contents

- 2 2度の「大学アーカイブズ」
東京大学文書館 小根山美鈴
- 4 保存と利用公開のバランス
東京大学文書館 白川 栄美
- 6 受贈図書・刊行物一覧（抄）
（2014年8月～2015年1月）
- 7 業務日誌（抄）
（2014年8月～2015年1月）
- 8 寄贈・移管資料
（2014年2月～2015年1月）



大学南校 ドイツ語教科書

大学南校で使用されたドイツ語教科書。当時の学生、鈴木良輔が使用したもの。鈴木良輔の孫にあたる鈴木董本学名誉教授より東京大学に贈呈され、文書館で保存することとなった。



2015年1月26日、東京大学の文書管理研修において、森本祥子准教授が「東京大学法人文書の管理と保存」と題して講義を行いました。



2度の「大学アーカイブズ」 —ダイジェスト：東京大学文書館前史—

東京大学文書館 小根山 美鈴

1 はじめに

2015年4月1日、東京大学文書館（以下、大学文書館とする）が設置され1年が経つ。現在、同館は本郷キャンパス1号館の本館と、柏キャンパス総合研究棟に位置する分館の2分館で運営している。大学文書館については、本誌47号（2013年）で吉見俊哉副館長（当時室長）が、大学史史料室を大学文書館に発展させるための重要性を示し、51号では森本祥子准教授（当時特任准教授）が「公文書等の管理に関する法律（公文書管理法）」の趣旨を軸にしつつ、アーカイブズという専門分野からのアーカイブズ論の展開と、大学アーカイブズの意義を指摘している。53号では、佐藤慎一館長が新生大学文書館の役割とその現状及び課題を示唆している。東京大学文書館を担う人物達である。

筆者は2014年8月1日に柏分館に着任し、資料整理に格闘する毎日である。日常業務に少しずつ慣れてきた今、自分の所属する組織の理解を深める時が来たように考える。小稿では、前身組織である東京大学百年史編集室、編集室解散後の大学史史料室が存在した約40年間のうち、現在の大学文書館を含めて2度の大学文書館構想が存在したこと、その構想の違いと共通点を、ダイジェストで紹介する。

2 「大学アーカイブズ」の構想は2度、存在した

【表1】に、東京大学文書館の主たる沿革をまとめた。東京大学文書館設置に関する動きは、次の2期に分けられる。

(1) 第1期：大学文書館構想の先駆けと停滞（1983年～2010年3月31日）

「大学文書館」という用語が東京大学内で初めて公に出現したのは、『東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究』調査報告書（表1番号2）であると考えられる。この調査は、東京大学創立百年記念学術研究奨励資金による学内共同研究の報告資料である¹。研究グループは、寺崎昌男教育学部教授（当時東京大学百年史編集委員会副委員長、以下、肩書きは当時のもの）等の東京大学百年史編集委員会委員や百年史編集室室員で構成されていた。

調査の目的は、東京大学内の資料の散失を防ぎ、恒常的な収集保存と公開利用のための方策を立てるためであった。実施した調査は次の三つである。(1) 国内外における大学文書館（University Archives）の活動実態調査、(2) 外国における大学博物館（University Museum）の活動実態調査、(3) 東京大学大学文書の概要調査であり、今でも非常に興味深い調査内容であると考えられる。この調査の結論に提示されたのが、「東京

大学内に大学文書館を設置すること」であった。趣旨によると、「資料に学術的価値を認め、それらの系統的な収集・保存を行う」ことが主眼に置かれた、施設設置の要望であった。

この提示は、後に百年史編集室専門委員会によって、「東京大学史史料センター（仮称）」（表1番号3）の創設を目指すことになる。センター創設前の当面措置として「東京大学史史料室」（表1番号8）が再組織された。そして、大学史史料室の企画・運営等を、「東京大学史料の保存に関する委員会」（表1番号6）が当たることになった。

本誌1号（1988年）創刊の辞において、寺崎昌男元大学史史料室室長は、「日本の国立大学では最初のアーカイブズ（Archives）にしたい」と記している。当時では先進的な考え方だったことは言うまでもないが、先の提示と同様に、資料に「学術的な効用がある」と位置

【表1】東京大学文書館沿革（主要事項）

年	月日	トピックス	番号
1974年	5月21日	東京大学百年史編集室要綱制定	1
1983年	6月	『東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究』調査報告書	2
1985年	3月26日	東京大学史史料センター（仮称）設置の提案（百年史編集室専門委員会）	3
	11月13日	東京大学百年史編集室史料保存に関する懇談会設置	4
1986年	3月31日	東京大学百年史編集室史料保存に関する懇談会答申	5
	11月27日	第1回東京大学史料の保存に関する委員会	6
1984-1987年		『東京大学百年史』全10巻刊行	7
1987年	4月21日	東京大学史史料室の設置（安田講堂5階）	8
1988年	7月1日	東京大学事務局文書管理規則（全文改正）中、史料室への移管が明記	9
1994年	4月21日	東京大学史史料センター（仮称）の概算要求、第36回で終了	10
2001年	11月27日	大講堂（安田講堂）の改修工事に伴い、史料の移転	11
2002年	3月30日	中野実室員、逝去	12
	5月21-23日	史料室移転作業（改修後の安田講堂へ戻る）	13
2005年	6月15日	安田講堂3階倉庫の立上げ	14
2010年	3月3日	高橋進室長逝去	15
	3月31日	東京大学の史料保存に関する委員会、廃止	16
	11月4日	吉見俊哉室長（現副館長）就任	17
2011年	2月15日	第1回大学史料収集・管理の在り方に関するWG開催	18
2012年	10月1日	医学部1号館1階（事務居室S109号室）への移転	19
2013年	2月27日 - 3月19日	柏キャンパス総合研究棟へ史料移転	20
	4月1日	森本祥子特任准教授（現准教授）着任	21
	7月11日	大学史料収集・管理の在り方に関するWG、第7回を以て廃止	22
2014年	4月1日	東京大学文書館設置、佐藤慎一館長、吉見俊哉副館長就任	23
	9月1日	第1回東京大学文書館運営委員会開催	24

づけた寺崎氏の主張は、資料の利用者側としての視点にとどまるものであり、東京大学という組織の文書を継続的に受け入れて保存するという、提供者側としてのアーカイブズへ発展する考え方とは言えなかった。

東京大学史料センター（仮称）の創設には困難を極めた。1987年3月開催の東京大学史料の保存に関する委員会会議議事要旨²には、その概算要求の経緯について「文書等の移管に関する規程等を整備した上でないと、文部省への概算要求説明に不備をきたすという事務局の判断を考慮して」、「来年度の概算要求にはむずかしいであろう。」と寺崎委員長（当時）からのコメントが記載されている。

さらに、同センターの構想の内容も時期を追って変貌を遂げ、最終的に総合研究博物館構想に取って代わり、結局、国の予算政策方針のもとで、同センター構想は潰れた³（表1番号10）。

(2) 第2期：大学文書館構想の再出発（2010年11月～2014年）

本誌22号（1999年3月）の田中学元史料の保存委員会委員長による投稿が目をひく。未だに大学史料室が大学アーカイブズへ発展していないことを憂える内容だった。

大学史料室の設置から23年、中野実室員の逝去（表1番号12）、次いで高橋進室長の逝去などが重なり（表1番号15）、アーカイブズの動きに停滞が見える。転機は、2011年、吉見元室長によって、東京大学史料の保存に関する委員会が再組織され、「大学史料収集・管理の在り方に関するWG」（表1番号18）が開催されたことである。こうして、大学史料室が再び息を吹き返した。

WGの目的は、「東京大学150年史の編纂に関わる基盤づくりを含めた歴史的価値を有する文書を収集・管理する体制を整えるとともに、平成23年4月に施行される公文書等の管理に関する法律（公文書管理法）に適切に対応するための体制作り等を検討する」ものだった。

同WGの中間報告⁴に盛り込まれた内容は、大学史料室設立の経緯から、他大学における文書館機能の充実や公文書管理法の施行と情報公開制度への対応、デジタルアーカイブ化の進展などの社会的背景を踏まえ、大学文書館の活動と組織編成等を提案する、抜本的な改革であった。現在の東京大学文書館の基本構造を成した改革である。

3 共通点：本郷キャンパスを拠点に

第1期、第2期で用いられた「大学文書館」という用語が果たす意味合いには、違いがあった。しかし、両者の構想に共通点が一つある。それは、本郷キャンパスに施設を置くことに重点が置かれていたことである。

先の東京大学史料センターの設置の提案では（表1番号3）、センターの性格として「①特定部局に属さない独立センターとする」とし、施設は「①本学を象徴する歴史的施設であり、現在百年史編集室も置かれている大講堂（安田講堂）を本部とすることを希望する」とされていた。実際に、百年史編集室は安田講堂6階に位置

し、大学史料室も2012年の安田講堂改修工事に至るまで5階に事務室、地下倉庫、3階～7階に書庫を構えていた。

大学文書館（大学アーカイブズ）と安田講堂の関係については、「安田講堂の再生と大学アーカイブズ」⁵によると、関東大震災後の本郷キャンパスの復興は、工学部建築学科教授で後の総長となる内田祥三の構想の下に進められたものであり、その建築は全学的に利用される機能かつ、知的な内容と歴史が含まれる建築を目指していた。また、「安田講堂は依然として東大のシンボルとしての役割を果たして」おり、「アーカイブズがキャンパスの象徴となりうるのは、大学を構成する人々全員の活動の歴史がここに集約されるからにほかならない。」とまとめられている。

この論考を発展させる形で、「東京大学アーカイブズ計画—安田講堂の再生・再利用の提案—」⁶では、大学アーカイブズを研究施設、展示施設、催事施設等の複合した複雑な施設だと仮定して、設計図面が掲載されているところが興味深い。

第2期では、先の2011年「大学史料収集・管理の在り方に関するWG」（番号18）の中間報告においても、内田の建築構想を掲げている。その構想は、本郷キャンパスの主導線である、正門から安田講堂へ至る軸線が東京大学を象徴するものであり、その軸線上に大学の行政、学務等に関する根本資料を持つ文書館を位置づけるべきであるというものである。報告の最後には、実現できる案に、安田講堂前庭地下の中央食堂を文書館として再生させるプロジェクトを推進している。

筆者は、大学アーカイブズに必要なのは、大学の行政が行われている本部に最も近い場所に位置することだと考える。法人文書の移管を円滑に調整できるだけでなく、大学の「頭脳」の近くに存在することによって果てしないメリットが期待できるからである。

東京大学文書館は新たな一步を踏み出した。大学の「頭脳」を支える組織になるであろう未来に、大いに注目していただきたい。

¹『東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究：昭和56・57年度研究調査報告』、東京大学百年史編集委員会編、東京大学百年史編集室、1983年

²第4回東京大学史料の保存に関する委員会 1987年3月3日開催

³第36回東京大学史料の保存に関する委員会議事要旨（案）1994年4月21日開催

⁴大学史料収集・管理の在り方に関するWG「東京大学史料室の東京大学学術文書館への改組 基本計画案（中間報告）」2011年10月4日（デジタルデータ）

※上記全資料は東京大学文書館所蔵

⁵稲垣栄三『東京大学史紀要』第5号、1986年2月、pp.90-92

⁶稲垣栄三、香山壽夫『東京大学史紀要』第6号、1987年3月、pp.27-31

（おねやま みすず）

保存と利用公開のバランス

東京大学文書館 白川 栄美

1 はじめに

収蔵資料の公開の重要性については、『東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究』の中で「大学文書の公開は、本学のひとつの使命とさえ考えられる」¹と主張されているように、東京大学文書館（以下、当館）の前身となる東京大学史料室、ならびに東京大学史料の保存に関する委員会が設置される以前から強く意識されていた。しかし、残念ながら、資料の物理的な保存や収蔵庫の保存環境についての詳細な方針や規定は定められていなかったようである。「東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究」研究グループが、1983年に東京大学文書館の設置を提言した際、文書館の果たす機能は、「文書の整理・保存及び目録作成のほか、適当な文書の公開・閲覧等を行う。」と述べているが、具体的な保存方針については記述がない²。その中で、大学文書館設置の第一の理由として、資料の長期保存ではなく、散逸防止が挙げられている。1987年4月21日より施行された東京大学史料室規則では、大阪大学アーカイブズの菅真城准教授が指摘するとおり³、史料室の業務は資料の「収集、整理及び保管」と定められており⁴、「保存」ではない。上記2点からも、当時は物理的な資料の保存管理に関する意識が低かったこと、また、大学文書館の役割の重点は、資料の長期保存ではなく、資料の収集と利用におかれていたことが推定できる。

東京大学文書館は、2014年4月、総長統括委員会の下、新たに設置された。本郷キャンパス（本館）と柏キャンパス（分館）に収蔵室を備え（本館59㎡、分館391㎡）、現在、国立公文書館等に指定を受けるべく、準備を進めている。当館が国立公文書館等の指定を受けた場合、法の定めるところにより「歴史的公文書」の公開が義務づけられ、利用提供を前提とした収蔵資料の保存管理が必須となる。ここで問題になるのは、いかに利用公開による資料の劣化を最小限に食い止め、かつ提供を全面的に考慮した保存管理を行うかである。

言うまでもないことだが、利用の頻度が高くなればなるほど、資料は劣化の危機に直面するため、資料の保存にとっては好ましくない。この互いに相反する原理の狭間で、このふたつのバランスを保ちながらアーカイブズの使命を遂行することは、アーカイブズが抱える最大の課題であると言える。このふたつのバランスをうまく保つために必要なことは何か。最も効果的で合理的と考えられているのは、一連のアーカイバル・サイクルを包括的に捉えた保存方針を持ち、その上で、戦略的に長期保存管理計画を立てることである。その際、特に、予防的手段、不必要な原資料のハンドリングを最小限に抑えること、アウトリーチプロジェクトの有効活用、ならびに保存科学・保存修復専門家や専門機関との連携などを考慮する必要がある。ここでは、予防的手段について、1

月の英国出張で見聞した情報を紹介しながら、当館の保存環境管理への取り組みについて述べる。

2 当館の取り組み

当館では、「予防に勝る良薬なし」を実行するべく、保存環境管理の一環として、昨年度より、温湿度、ならびに害虫モニタリングを開始した⁵。日常的なモニタリングによる今年度の第一の目的は、自館の収蔵庫の特徴を理解することである。年間を通した温湿度の変化だけでなく、外気の影響や収蔵庫内の空気の流れや淀む場所などの確認も進めている。また、昨年12月末に柏分館にLED照明を設置したことにより、閲覧室の照度モニタリングも開始した。しかし、実際、モニタリングデータの有効な活用方法や温湿度の適正管理、資料の物理的な劣化要因の特定など、保存環境管理には科学的見地が必要不可欠であり、アーキビストだけの判断には限界がある。模索の折、イギリスの文書館を訪問し、保存環境管理について調査を行う機会を得ることができた⁶。英国標準PD5454の内容に基づき、イギリスのアーカイブズが保存環境管理を館の中でどのように位置づけ、またどのような取り組みを行っているかについて調査を行った。

イギリスの公文書館では専門ごとに分業されており、通常、コンサバター（conservator）が、保存方針の作成・改訂から定期的な温湿度や害虫モニタリングまで、保存環境管理全般を担当する。各館では、適正で効率の良い保存環境管理のために様々な取り組みがなされている。たとえば、英国国立公文書館（The National Archives UK、以下、TNA）とノーフォーク州立公文書館（Norfolk Record Office、以下、NRO）では、温湿度を月ごとに異なる値に設定し収蔵庫・閲覧室の管理を行っている⁷。この管理方法の利点は、第一に、一年を通し一定の温湿度で保存する方法と比べて、長期的な資料への劣化影響が少ないことで、その有効性はTNAの環境シミュレーションを用いた研究結果に示されている⁸。第二に、空調を常に24時間稼働する必要がないため、資源の大幅な節約になることである⁹。この方法は、年間の気温変化の少ないイギリスの気候とTNAの収蔵資料の性質や収蔵施設の構造上の特性が実現可能にさせていると、保存修復・研究開発部門主任のコスタス・ザノス氏は述べている。

当館では、8月に除湿機と空調を24時間稼働しなれば、相対湿度は70%を超えるが、1月は何もしなくても30%まで減少する。年間の気温変化が大きい日本のアーカイブズで同様の方法を用いても同じ結果を得ることはできないだろうが、年間を通した温湿度差を最小限に抑えるため、新しい方法も取り入れ検証していく必要があるだろう。



ヨーク大学アーカイブズの保存修復室



NRO (左が文書受入室、右が保存修復室)

環境モニタリングの他に、適正な保存容器の選択はミクロ的劣化予防手段であると考えられている。そのため、根拠の無いまま中性紙製の封筒や箱にとにかく入れるという選択は避け、慎重に容器の選択を行う必要がある。当館では、長期保存管理計画を戦略的に構築するための一歩として、資料の状態調査を開始する。状態調査では、3～5種類の評価基準を設け、資料の状態、保存容器の入れ替えの必要度、代替作成の必要等を評価し記録することを検討している。この結果を基に、収蔵庫の温湿度管理や資料の利用頻度や公開方法、資源や作業の効率等も考慮にいれ、今後、段階的に、アーカイバル容器による資料の「装備」¹⁰を行うことを予定している。

3 おわりに

文書館は、常に、そして継続的に保存と利用というふたつの重要なアーカイブズの原理に関して、どのような方法でバランスを保つかという決断を要求される。決断には、利用者のニーズや財政状況など、優先順位の上で対立せざるを得ない要素が多く、それらはアーキビストの決断をより複雑に、また時には不可能にもする。当面の課題を克服することや百年先まで見越した保存管理を視野にいれることは大切である。しかし、百年先のアーキビストへ資料を遺すことより、10年、20年後のアーキビストへ最善の状態で資料を残すことを、アーキビストは最優先させる必要があるのではないだろうか。その繰り返しが、百年、また千年先へ資料を遺すことになるのだろう¹¹。

最後に、アーキビストと保存科学の専門家との連携の必要性について言及する。この度出張で訪れた唯一の大学アーカイブズであるヨーク大学アーカイブズ(Borthwick Institute of Archives)は、TNAやNROと同様に、アーカイブズ収蔵施設として建造された建物で、独自の保存修復室を持つ(コンサバターは4名)。しかし、TNAやNROが資料の移動導線を最優先条件として設計した一方で、ヨーク大学は、アーキビストとコンサバターの連携を第一に考え、保存修復室とアーキビストのオフィスは談話スペースを囲むように隣り合わせになるように設計されている。30年以上ここでアーキビスト(Keeper of Archives)として勤務するクリストファー・ウェブ氏が、アーキビストとコンサバターの連携は有効な資料の保存管理において必要不可欠であり、そのことによりアーキビストが得る利点は大きいと述べていたことが強く印象に残る。

資料にとっては何百年もの棲みかになる収蔵庫であ

る。科学的な見地・検査に基づき管理しなくてはならないことは必至であり、保存科学の専門家と一層の連携をとることは、今後の日本のアーカイブズに求められるひとつの課題であると思われる。

¹ 「東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究」研究グループ『東京大学創立百年記念学術研究奨励資金による学内共同研究、東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究、昭和56・57年度研究調査報告』、p. 24

² Ibid

³ 菅真城『大学アーカイブズの世界』、p. 151、2013年

⁴ 東大規則第5号本学一般、東京大学史史料室規則、『諸規則等』。1987年の施行以降、改変されていない

⁵ 詳細は、『東京大学文書館ニュース』53号を参照(村上こずえ「収蔵庫等における害虫モニタリング調査について」、pp. 45)

⁶ 2015年1月、学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻安藤正人教授の科研調査研究の一環として、以下の文書館を調査訪問した：The National Archives UK, British Library, Lambeth Palace Library, Norfolk Record Office, Borthwick Institute of Archives, York City Archives。このような貴重な機会を与えてくださった安藤正人教授と、国文学研究資料館機関研究員高科真紀氏に心より感謝申し上げます。調査訪問の詳細については、後日、高科氏と共同報告を行う予定である

⁷ NROでは、独自の計算式を用い、月毎の適正温湿度を割り出している

⁸ <http://www.nationalarchives.gov.uk/documents/information-management/building-environment-simulation-project.pdf>

⁹ 電気代40%削減。TNAでは、数年前より平日の閉館後は空調を稼働させていない

¹⁰ 山田哲好、廣瀬睦「史料館における史料保存活動」、『史料館研究紀要』第22号

¹¹ Gollins, T., 'Parsimonious preservation: preventing pointless processes! (The small simple steps that take digital preservation a long way forward)', <http://www.nationalarchives.gov.uk/documents/parsimonious-preservation.pdf>

(しらかわ えみ)

受贈図書・刊行物一覧(抄) (2014年8月～2015年1月)

学外刊行物

青山学院資料センター

Aoyama Gakuin Archives Letter—青山学院資料センターだより— 第10号

大阪市立大学大学史資料室

大阪市立大学史紀要 第7号

関西学院

関西学院事典

九州大学附属図書館付設記録資料館

九州大学附属図書館付設記録資料館ニューズレター No. 1～No. 8

京都大学大学文書館

京都大学大学文書館だより 第27号

慶應義塾大学アート・センター、慶應義塾福沢研究センター

慶應義塾と戦争Ⅱ 残されたモノ、ことば、人々

国文学研究資料館広報出版室

国文研ニューズ No. 35～No. 37

国立公文書館

北の丸—国立公文書館報— 第47号

札幌市総務局行政部公文書館

札幌市公文書館年報 平成25年度 第1号

尚友倶楽部

山川健次郎日記 —印刷原稿 第1～第3、第15— (尚友ブックレット28)

全国大学史資料協議会東日本部会

大学アーカイヴズ No. 51

大東文化歴史資料館

大東文化歴史資料館だより 第16号

玉川大学教育博物館

玉川大学教育博物館 館報 第12号

東海大学七十五年史編集委員会委員長

東海大学七十五年史編纂だより 第1号

東北大学学術資源研究公開センター史料館

これからの大学と大学アーカイブズ—東北大学史料館創立50周年記念講演会・シンポジウムの記録—
東北大学史料館だより 第21号

日本大学広報部大学史編纂課

日本大学大学史編纂課だより 第7号

立教学院展示館

立教学院展示館〔図録〕

立命館大学国際平和ミュージアム

立命館大学国際平和ミュージアムだより
VOL. 22-1～2

横浜開港資料館

開港のひろば 第126～127号

わたつみ記念館基金わたつみのこえ記念館

2014年企画展 戦没学生の遺稿にみる「特攻」史料集

全 98点

※他、多数の資料を寄贈いただきました。今後も引き続き、アーカイブズ関係刊行物のご寄贈をお待ちしています。

学内刊行物

東京大学

東京大学ダイジェスト 2013-2014
学生ハンドブック = International student guide
book 2010～2012

東京大学本部学生支援課

本郷の学生生活 2014

東京大学教養学部

教養学部報 第568号～第571号

東京大学工学部

東京大学工学部便覧 平成26年4月

東京大学理学部

リガクル : 東京大学理学部の今がわかる
2014-15

東京大学校友会

東大校友会ニュース 27号

全 117点

業務日誌(抄)

(2014年8月～2015年1月)

8月 1日(金)	小根山美鈴教務補佐員、白川栄美教務補佐員着任	12月 11～12日(木)～(金)	小根山、白川、国立公文書館主催の公文書管理研修(第2回)に部分参加(墨田区)
9月 1日(月)	館員打合せ(本郷) 第1回文書館運営委員会開催	12月 15日(月)	藤井恵介工学系研究科教授のところ森本、小川、小根山、白川、工学部資料について調査
9月 2日(火)	柏分館収蔵庫(609・620)、空調24時間稼働開始	12月 16日(火)	館員打合せ(柏)。国際基督教大学大学歴史資料室関係者(4名)、見学受入れ(本郷)
9月 19日(金)	全国歴史資料保存利用機関連絡協議会関東部会にて森本が「東京大学文書館の設置—これまでの道のりとこれからの展望—」と題して講演。小根山、白川、参加	12月 22日(月)	京都大学大学文書館坂口貴弘氏、来館(柏)
9月 29日(月)	館員打合せ(本郷)	12月 31日(水)	森本、総合研究博物館特任准教授退職
9月 30日(火)	谷本、大学院教育学研究科助教退職	1月 1日(木)	森本、文書館准教授着任
10月 24日(金)	柏キャンパス一般公開日、パンフレット配布による広報活動	1月 12～18日(月)～(日)	白川、科研「国際コンソーシアムによる「原爆放射線被害デジタルアーカイブズ」の構築に関する研究調査」によるイギリス出張
10月 29日(水)	柏分館収蔵庫、空調・除湿機の稼働停止	1月 22日(木)	森本、予備門関係資料について調査(駒場)
11月 5日(水)	館員打合せ(本郷)	1月 26日(月)	学内法人文書管理研修にて森本、「東京大学法人文書の管理と保存」と題して講義
11月 14～16日(金)～(日)	森本、第40回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会大会出席	1月 27日(火)	館員打合せ(柏)
12月 5日(金)	国立公文書館等指定審査のための内閣府による視察		
12月 9日(火)	学習院大学大学院アーカイブズ学専攻および江東区区政資料室(5名)、見学受入れ(本郷)		

閲覧者数	学内者 4名 / 学外者 32名
主な学外閲覧者所属機関	愛知大学、茨城県庁、お茶の水女子大学大学院、学習院大学、九州大学、渋沢史料館、清水建設技術研究所、東京農業大学、東北大学、長岡造形大学、新潟県立歴史博物館、北海道大学、立命館大学
その他	文献撮影・複写許可 30件 / 調査(照会) 27件

寄贈・移管資料一覧 (2014年2月～2015年1月)

2014年 3月	F0112	昭和44年1月10日全学集会録音記録
2014年 4月	F0144	宮原俊雄関係資料(工学部卒業証書(1934年)ほか)
2014年 4月	F0152	山川健次郎関係資料(山川健次郎宛書簡など)
2014年 4月	F0153	鶴見正四郎・正彦関係資料(工科大学機械工学科卒業証書(1899年)ほか)
2014年 5月	F0155	上田康太郎関係資料(法学部卒業予定者採用申込一覧表(1943年9月)ほか)
2014年 5月	F0164	佐藤慎一関係資料(大学紛争期のビラ類ほか)
2014年 5月	F0165	文学部長室旧蔵資料
2014年 5月	S0079	小宮山宏関係資料(総長在任中の事務ファイル)
2014年 8月	F0187	岩松良関係資料(刑法総論講義録)
2014年 10月	F0212	守矢日出男関係資料(第二工学部関係資料)
2014年 10月	S0075	学生支援課移管資料
2014年 12月	F0058	中小左次関係資料(法科大学時代の講義ノート)
2015年 1月	F0215	鈴木良輔関係資料(大学南校時代のドイツ語教科書)

東京大学文書館ご利用案内

観覧日：毎週火・水曜日

(ただし、祝日及び年末年始を除きます。また臨時休館もありますので、電話にてご確認ください)

観覧時間：9:30～12:00、13:00～16:30

複写：電子複写は行っておりません。自影か自写に限ります。

場所：(1) 本館

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学本郷キャンパス内 医学部1号館2階SC201

(2) 柏分館

千葉県柏市柏の葉5-1-5

東京大学柏キャンパス内 総合研究棟6階609号室

※ 2015年4月より観覧日などを変更する可能性があります。ホームページ等でお知らせいたします。

東京大学文書館ニュース 第54号

ISSN 0915-3284

発行日：2015年3月31日(年2回発行)

編集・発行：東京大学文書館

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077(直)

http://www.u-tokyo.ac.jp/history/index_j.html

印刷所：株式会社ワーナー